

目次

80回、81回、82回スウェーデン研究連続講座

80回

絵本作家エルサ・ベスコとタント・ブリュン(茶色おばさん)の思い出

股野 儼子

81回

進化する通信技術と持続可能社会

フレドリック・アラタロ

82回

スウェーデンの高齢者ケアのノウハウと日本での実践

ヨアキム・カウト

随筆

わたしのスウェーデン

山口 元子

レポート

イエーテボリを舞台にした「ステフィとネッリの物語」について

塩田 敦士

レポート

学生の議論と主体性を引き出すスウェーデンの大学環境

小林 秀行

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所 所報

No.346 2009年03月31日発行

発行所:社団法人スウェーデン社会研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1

榊科学新聞社内5階

連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7

Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596

e-mail: sweden@tkm.att.ne.jpURL: <http://www.sweden-jiss.com/index.html>

発行人・編集責任者: 林壮行

Publisher&Editor in Chief: Takeyuki Hayashi

編集者: 久保田健司

Editor: Kubota Takesh

第80回 絵本作家エルサ・ベスコーとタント・ブリュン(茶色おばさん)の思い出

元駐スウェーデン日本大使夫人
股野儷子

「講演のご案内」

ストックホルムの郊外、ユーシュホルムにある日本大使公邸は、その由緒ゆえにスウェーデンの歴史的建造物としての指定を受けています。

今回の講演者、元駐スウェーデン大使夫人、股野儷子さんは大使公邸が、スウェーデンで最も有名な絵本作家エルサ・ベスコー(Elsa Beskow)と不思議で深いつながりがあることを見つけ、調査、探求を続けてきました。今講演はそのベスコーにまつわる興味深い物語を中心に、公邸をめぐる人々との出会いを、貴重な写真とともにお話いただきます。

特に今年(2008年)は4人の日本生まれの方々がノーベル賞を受賞されました。毎年12月10日がノーベル賞授賞式です。日本大使公邸でも受賞者を迎えて夕食会や、レセプションなどが開かれますが、その様子などもご自身の経験談を含めてご紹介いただきます。

「講演の抄録」

エルサ・ベスコーはスウェーデンの有名な絵本・童話作家で、「タント・ブルン」(茶色おばさん)、緑、紫おばさんの3人が活躍する物語を多く書いた。この登場人物達のことは、スウェーデン人なら誰でも知っている。中でもふっくらとやさしい感じのタント・ブルンは人気者。彼女の家が後年日本大使公邸になろうとは、そこで活躍した主人公達は想像もしなかったであろう。

1994年10月、夫、股野景親が大使に任命された直後に、大江健三郎氏のノーベル文学賞受賞が発表された。着任前に成城のお宅へご挨拶に伺う。その場で、氏が作家になり、今回スウェーデンへ旅することになった背景には、子供の時お祖母様から与えられた1冊の本があったことを知る。いま一人のスウェーデンの有名な女流作家、初の女性ノーベル文学賞受賞者でもあるセルマ・ラーゲルレーフ(Selma Lagerlof)作の『ニルスの不思議な旅』である。そして、着任後わずか10日ほどで、最初の客人としてご一家を公邸へお迎えした。

スウェーデンの女流作家の作品にいざなわれてストックホルムに来られた大江氏が困となって、「日本大使公邸がタント・ブルンの家だった」歴史的事実が明らかになっていく。そして、94年の11月から97年9月までの住人、股野大使がそこに深く関わっていた「ご縁の不思議」も交えてお話をしたい。

「タント・ブルンの家」が日本大使公邸になる経緯は1981年にさかのぼる。当時の日本大使から「公邸が手狭になった」と、日本の外務省に新しい公邸購入希望の申し出があった。当時股野は在外公館課長を務めており、82年の冬、公邸候補の物件を視察した。厳冬の1月のこと、公邸眼前のバルトの入り江は凍り、対岸の島まで一面の雪野原、何処から海面なのか見当もつかず、かなりの平原が公邸の前に広がっているとの印象を持ったという。そこが「タント・ブルンの家」だったと知るのはずっと後のことであり、またその家にやがて自分が住むことになろうとは、知る由もなかった。

そして12年後、94年の10月に股野はスウェーデン大使に任命され、その直後、川端康成氏の受賞から数えて実に26年ぶりのノーベル文学賞に、大江健三郎氏が選出された。受賞国の大使にとって、ノーベル賞受賞者のもてなしと、現地での手配は大きな仕事であった。私達はスウェーデンへ赴任する前に、先ず大江家を表敬訪問した。大江家にあがると、奥様が紅茶とケーキを用意してくださった。好みの良い白地に花柄のヨーロッパ調のカップやお皿、おいしそうなケーキに興味もありご厚意を感謝した。大江氏は作家としての今までの道のり、西欧文化について熱弁を振るわれ、私は「時の人」大江家のお茶とケーキを味わってみる貴重な機を失し、内心で落胆したのを覚えている。

大使任命から授賞式までは時間がなく、当地では多忙を極めた。新任の大使は国王陛下に信任状を捧呈する。通

常は数週間を要するが、前述のような事情のため、わずか10日でその機会が与えられた。大使館から王宮へは馬車か自動車かどちらかを選べどのお沙汰があり、大使は迷わず馬車を選択した。大使と館員3名は燕尾服にシルクハットの正装に威儀を正して馬車で、他の者は自動車で車列に従う。王宮広場に差し掛かって、さすがにスウェーデンらしいと感じたことがある。王宮前の石畳の広場では観光客など人々が集まって見物が許され、その最前列には車椅子に乗った人たちの場所が用意されていたことであった。

12月2日に信任状捧呈、4日には大江ご一家がストックホルムに着かれた。大使公邸では内輪の夕食会を開くことになった。大江氏は和食を希望された。日本で大江家を訪問した際話題になった『ニルスの不思議な旅』を思い出し、ニルスに関係のある献立、食卓の設えを考え、一枚の紙の裏表を巧みに使って折ったメスの雁アツカの脊に乗って飛んでいるニルスを中心に、茶色の雁の群れをテーブルの端から端へ1列に飛ばした。ストックホルム在住の有名な折り紙作家、鳥本範夫氏の価値ある作品である。花は季節外れではあったが、アイリスと菊を用意した。青と黄色でスウェーデンの国旗の色を表してみた。大江氏にはニルス、他の客人には雁の折り紙を記念にお持ち帰りいただいた。

会食のメニューも、スウェーデンの花びらをすきこんだ和風の紙を表紙に、和紙にワープロで打って各人用に手作りした。お料理のネーミングにも智恵を絞った。前菜に「ニルスの不思議な旅」、お吸い物に「めでたいおすまし」、焼き物に「バルト海のかくれんぼ」、煮物に「山幸彦の一碗」、揚げ物に「海幸彦のひと籠」と名前をつけた。それに汁、炊き込みご飯かお蕎麦、香の物、菓子にはノーベル賞をイメージしたものを用意した。前菜の「ニルスの不思議な旅」は、小人となったニルスがスウェーデンの南部スコネから最初の旅に出る時空から見た風景、畑の「市松模様」をイメージし、鮭とグリーンピースで田の形に仕上げたテリーヌをお出した。大江氏ご子息の光さんには別の一皿をとのご所望があり、スパゲッティとカツレツを用意した。氏の著作『新しい人よ、目覚めよ』の中に、それが光さんの好物という記述があったので参考にした。

この記念すべき夕食会を催した部屋で、実はタント・ブルンの娘の結婚披露宴も行われたとは後で知ることになるのだが、残念ながらこの時は話題にすることは出来なかった。

ノーベル賞関係の一連の行事は、アルフレッド・ノーベルの命日12月10日の授賞式を中心に、6日から13日まで公式行事が華やかに繰り広げられる。レセプションなど行事の一部は受賞国の大使館に割り当てられる。日本大使館は「ノーベル・コンサート前のレセプション」を担当することになった。当時の公邸では手狭で、これほど大きなレセプション開催は無理と考えられ、グランドホテルのホールを借りて客人を招待した。

このことがきっかけで、公邸の増改築のプランが持ち上がる。しかし、邸が歴史的建造物に指定されているため、外観が変わるほどの増築は許可されないという。

着任後、年が明けて3月のある快晴の日、初めて一人で散歩に出てみる。その時の長身のスウェーデン婦人、エリサベート・ネイデルとの出会いから、公邸にまつわる「タント・ブルンへの不思議な旅」が始まることになる。

彼女は国家公共建物庁をリタイアしたばかりの元公務員で、在外のスウェーデン大使館など公共建物を記録する書籍の編集に携わっていた。東京に滞在し、在京大使館の歴史の記録本を編纂したという。彼女の紹介で、ユーシュホルムの古老が集まって勉強する歴史研究会に出席し、日本大使公邸の歴史について話を聞くことが出来た。この館は、もともと「ヴィラ・ソルヴァンゲン (Villa Solvängen)」と名づけられていた。「Villa」は「館」、「sol」は「太陽」、「vängen」については古老のメンバーでさえわからないと言う。その意味が、ノールウェー語で「平原、丘」であることは、後に在ノールウェー日本大使館の専門調査員から聞く。早速公邸を「日向が丘の館」と名づける。この「ノールウェー」が後々「不思議な旅」の謎解きのキーワードとなっていく。

タント・ブルンの家「ヴィラ・ソルヴァンゲン」の建てられたユーシュホルムの土地柄は由緒あるもので、その歴史は古く、15世紀までさかのぼる。その地名「Djursholm」は、「djur」は「動物」、「holm」は「島」を意味し、中央の「s」は「の」を示す。「動物の島」すなわち「王のお狩場」であった。現在も地元の種々行事が行われているお城を中心に、グスタフ・ヴァーサ王とも姻戚関係にある名家によって300年以上にわたり統治されてきた。

時代は下り、1889年に、アメリカ帰りの銀行家ヘンリック・パルメがかの地を真似て「ユーシュホルム有限会社」を設立し、裕福な文化人を対象に区画の大きな住宅地を売り出した。(暗殺されたウーロフ・パルメ首相はヘンリックの甥に当たる)ストックホルム、スヴォールネス間に鉄道が敷かれ、通勤列車の沿線に広がっていった田園都市だ。

当時、このあたりの地元の教会はダンデリードの教会であったが、遠方で不便な為チャペルも学校も城の中に作り、エステート内で独自の生活をしてきた。後、学校は独立して最初の男女共学校として名高い名門校「サムスクーラン」として育っていく。一方チャペルは、1890年代の半ば、当時人気のあったナタナエル・ベスコーが当地の牧師として赴任したのを機に「ユーシュホルム有限会社」が土地を提供して「ユーシュホルム教会」が建てられた。教会はストックホルムの王立劇場「ドラマッテン」を設計した王室お抱えの有名な建築家フレドリック・リリエクヴィストによって建てられ、内装は牧師であり画家でもあったナタナエル・ベスコーによってなされた。この牧師こそその名から知れるよ

うに、エルサの夫である。教会の天井近くには聖家族の壁画がある。「聖母マリアは母、赤ちゃんのキリストは長兄のステイーグがモデルで、父が描いた」・・・とは、グレンメ牧師に紹介されたエルサの五男坊ヨーラン・ベスコー氏の説明で知った。また、このステイーグは日本とも関係が深い。1924年から27年までの3年間ガデリウス商会の社員として神戸に住んでいた。当商会の社史にかつらを被り、日本婦人に扮した写真が残っている。こんな昔に公邸とエルサのご縁の伏線が張られていたとは、感慨深いことである。

ダンデリードの地図を見ると、各道路に囲まれた住宅区画には区画名がついている。文化人対象に売り出された「田園都市ユーシュホルム」のそれは特別で、サムスクーランの監督官でもあった作家で詩人のヴィクトル・リードベリ編纂の北欧神話から全て名を取っている。また、その区画内の家の平面図横には、館の名前が記されているものもある。前述の古考たちによる歴史研究会の研究誌「ユーシュホルムの過去・未来」1994年号には

ヴィラ・ソルヴァンゲン：区画名はエリヴォゴール

1907年トールベン・ギュット設計。

1941年焼失後復元される。

最初の家主、ノールウェー生まれの卸売業者ハーコン・ブリュンが名づける。

・・・ここ数年は日本大使公邸になっている。

と、歴代の所有者も、有名芸術家による内装などと共に紹介されている。

こうした由緒ある土地柄の故か、ユーシュホルムにはアジアやヨーロッパの何軒かの大使公邸がある。ある時、この土地所縁の大使夫人方をお招きして「地縁の昼食会」を開いた。この日の話題にと、研究会の最長老ブロール・フォルケル氏が公邸の建築図面をコピーして届けて下さる。ところがこれがきっかけで、「不思議な旅」は思わぬ展開を見せた。

土地の百年史にも発表されていたこのヴィラの設計者は「トールベン・ギュット」ではなかったことが判明。フォルケル氏の手にある図面には「カール・ギュットレール(Karl Guettler)」とのサインが日付入りではっきりと記されている。1941年焼失後もギュットレールによって修復されたことも、その日付とサインで知れる。

では、「カール・ギュットレール」とは何者か？

彼について調べていくうちに、「ノールウェー」、「エルサ・ベスコー」から「タント・ブルン」へとつながる糸は、瞬く間にたぐり寄せられていった。

1906年ヴィラ・ソルヴァンゲンの設計図を引き、翌年建物を完成させたカール・ギュットレールは20世紀初期の有名なノールウェー人建築家。ユーシュホルム百年記念の本の中で、娘のシャスティ・ブロンデルが父親のことを「自然に親しむ生活を好み、登山家だった」と紹介している。若い頃既に「素朴な木造建築のコンテスト」で賞を取っており、それが当時「自然に溶け込んだ文化生活」を目指した「田園都市ユーシュホルム」の住人の好みと一致して、注文が殺到したらしい。ノールウェー出身の為か、その作品は素朴な古いソルディックスタイルを色濃く残す。野外博物館スカンセンでは彼の作った代表的な山小屋ホーグロフトット(Hogloftet)やニーロフトット(Nyloftet)を見ることが出来る。

公邸に「日向が丘の館」と日本語で命名してから時は流れ、約1年後の1996年11月、ストックホルムのイタリア大使館で大きな晩餐会が催された。そこでいよいよ「タント・ブルンがヴィラの最初の住人である」ことを証言する「生き証人」と出会う。ヴィラを注文建築したハーコン・ブリュンの孫、イングリッド・セイエルストウローレ夫人である。大勢の客人の中で彼女と名のり合うきっかけとなったのは、たった1つの前置詞、「på」である。「私はユーシュホルムに住んでいる」と自己紹介するのに、通常の英語の「in」に当たる「i」を使わず、「at/on」に当たる「på」を使ってみたのを聞きつけて、「そう！ユーシュホルムには「på」でなくっちゃ」と話の輪に入り込んできたのが上品な白髪の婦人イングリッドであった。ユーシュホルムの土地っ子は、先祖代々由緒あるエステート内で暮らしてきたこと、近代でも特別な田園都市であること、またこのあたりは、昔土地が隆起してつながるまでは文字通り「島」であったことなどから、「at/on」を使うことにこだわるのだという。

そして、イングリッドの口から次々と謎が解き明かされていく。

カール・ギュットレールの夫人は、エルサ・ベスコーの妹妹「アイナ」であること。子どもが増えて手狭になった為、祖父のハーコン・ブリュンが、同じノールウェー出身のギュットレールに新たに大きな館を注文建築させたこと。最初の家に名づけた「ヴィラ・ソルヴァンゲン」が気に入っていたので、新築の家も同じ名にし、親族の間では「前のを『小さなソルヴァンゲン』、新しいのを『大きなソルヴァンゲン』と呼んでいる」こと。ノールウェー出身の一族はいつも一緒にこのヴィラで、夏至祭やクリスマスを祝ったことなどが語られた。ハーコンの妻「エンマ」はエルサの親友。そんな関係からエンマを彼女の作品の主人公のモデルにした。エンマ・ブリュンの茶色を意味する名字「ブリュン(ブルン)」におばさん「タント」をつけて、茶色おばさん「タント・ブルン」の誕生というわけである。エルサ・ベスコーとタント・ブルン誕生の秘話、「日本大使公邸がタント・ブルンの家だった」事実が、タント・ブルンの孫娘自身から明かされ、その夜の格好の話題となった。

この夜のイングリッドとの出会いは更に天皇誕生日レセプション、年が明けて2月の「地縁・血縁の昼食会」の招待へと発展していく。エルサの姪、即ちアイナとカールとの娘シャスティ、エルサの五男ヨーラン、タント・ブルンの孫娘イングリッドとその兄、歴史研究会の重鎮などなど、ユースホルム所縁の友人知人が一堂に会し、タント・ブルンのお食堂でランチを楽しんだ。エルサの作品の絵本『ヨーランの本』のページを繰って「これはぼくが・・・」「わたしがモデル」と絵本の研究者には魅力的な事実が競って明かされた。

「お母様の作品『ペーテルとロッタのクリスマス』の舞台はユースホルムって本当ですか？」とある日本人客の質問が発端で、後日貴重な体験をすることになる。

スウェーデンでも毎年年末からのバレエシーズンには「くるみ割り人形」が上演される。1995年には若い振付師ペール・イズベリーによってチャイコフスキーの音楽はそのままに、ベスコの『ペーテルとロッタのクリスマス』をテキストにしたバレエがオペラ座で初演され、大好評と言う。三色のおばさんとブルーおじさん全員登場のこの物語の舞台は、タント・ブルンのお家。今全員がランチを楽しんでいるこの公邸そのものであることが口々に語られた。

早速にオペラ座に電話をしたところ、「シーズンも終わり近くでもう切符はない。来年まで待て」と言う。「来年はもうここに居ないかもしれない。タント・ブルンの家の住人だ」と先の経緯を明かしたところ、幸運なことに、「高価だが、バルコニー席でよければ2枚譲れる」とのこと。今自分が住んでいる家を「場」に華やかに繰り広げられるバレエ。登場人物の衣装も、ワンちゃんまでもが絵本とそっくりの舞台を見下ろす。不思議な体験であった。

エリサベート・ネイデルとの偶然の出会いから始まり、歴史研究会の古老方、イングリッド・セイエルストローレ、ギョットレールの娘シャスティやヨーラン・ベスコとの出会いが集大成して、「エルサ・ベスコ」、「タント・ブルン」と「公邸」が結びついた。大きな感慨を持って見たこのバレエこそ、スウェーデン在勤の一大フィナーレであった。

こうして思い出深い終着点へとたどり着き、「タント・ブルンへの不思議な旅」は終わった。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved

第81回 進化する通信技術と持続可能社会

エリクソン北東アジア・日本エリクソン(株) 社長
フレデリック・アラタロ(Fredrik Alatalo)

「講演のご案内」

昨今、携帯電話のない生活は考えられなくなりました。会話、メール、インターネット、動画、音楽など、よくもこんな小さな箱に多くの機能が入るものだとその進歩の速さに驚くばかりです。でも、携帯電話がどこでも使えるのは、ビルの屋上を始め、400-800メートル置きに立っているアンテナと中継器などインフラのお陰です。

スウェーデンで生まれたエリクソン社はこのインフラ事業では世界のトップランナーで130年の歴史を持ちます。インフラがなければどんなに進んだ携帯電話も只の箱に過ぎません。今回はその日本人である日本エリクソン(株)代表取締役社長のFredrik Alatalo さんに移動体通信からモバイル・インターネットへの進展、および、それに伴って私達の社会、生活がどのように変わっていくのかをお話いただきます。

Alatalo さんは、スウェーデンのリンショーピング大学を卒業後、エリクソン一筋にスウェーデン、ドイツ、オーストラリアで技術事業のリーダーとして活躍、通信事業分野で広範な経験を積み、数多くの国際会議やセミナーで講演しています。

「講演の抄録」

・日本における電気通信の市場とEricssonの立場について

私たちEricssonは、電気通信のインフラ製品(電話の交換機や無線装置、アンテナをはじめ、携帯電話で通信するために必要な設備)を提供しています。日本での競争相手には富士通、日立、NECなどが挙げられます。本日は、まず日本における電気通信の市場の現状からお話して行きたいと思えます。

現在、日本の移動体通信・ワイヤレスの加入者はおおよそ1億人です。これは実に、日本の人口の82.3%が携帯電話を利用していることとなります。その中の殆ど90%に近い方が第三世代の技術を利用しています。第三世代の技術というのは、音声のためだけに使うのではなく、データ通信などにも使用し、かつ高速で利用できる技術のことです。2008年現在、日本では第三世代対応の携帯電話しか出荷されていません。これは、世界で一番進んでいる市場であるということが言えます。また、日本では毎月5515円ほどのお金が電気通信の利用に支払われています。これは音声サービス、データ通信、インターネット閲覧、Eメール送信の総計ですが、その中でデータ通信が40%を占めていて、これも世界的に見て極めて高い数値です。そして、日本のユーザーがサービスに対して支払う金額は、2006年第2期の月額約7000円から、年々緩やかに下降しています。これは、ソフトバンクの低価格化が背景にあるようです。また近年、日本では面白い現象がみられるようになってきました。ディズニーがソフトバンクと提携してディズニーフォンを売り出したのです。これはMVNOといって、既存の事業者のネットワークを使ってサービスを行うというものです。これが市場の競争に拍車をかけました。こうした動きに追従するように、日本のベンダー(NEC、富士通、パナソニックなど)はより国際的なベンダー(Ericsson、Nokiaなど)との提携を求めようになり、またNTTドコモもインドのTata社に多額の投資を行うなど、日本の事業者の海外進出も盛んになってきましたが、モーガン・スタンレーの見通しでは、日本における電気通信事業者の収入は横ばいが続くと予想されています。

このような日本における市場の傾向の中で、Ericssonは日本の事業者と海外の事業者との橋渡しの役割を担うことができるのではないかと考えています。Ericssonは、日本での16年に及ぶ事業の中で、多くのネットワークを構築し、多くのサービスを提供してきました。この実績とその上に成り立つ非常に強固なローカルプレゼンスが、日本固有の技術の世界基準に適応するのに大きく役立つと考えているからです。

・モバイル社会の未来

次に、モバイルの世界が今後どうなってゆくのかを見ていきたいと思えます。具体的には、モバイルでブロードバンドサービスを利用するユーザー数がどのくらいになるのか、たとえばネットに繋いだり、Eメールを閲覧したりする等のことを携帯電話で行うようになるかということです。非常に興味深いのは、2006年以降、固定網に比べて無線上でデータ通信を利用する人数が劇的に増えているということです。無線上のデータ通信というのは、PCにデータカードを挿入してネットワークに接続する通信方法のことを指します。90年代の予想では、世界のユーザーは2000年代初頭に4000万人程度になるだろうとされていましたが、現在ユーザーは37億人を超え、さらに中国やインドでは毎月1000万人増え続けているという統計が出ています。そこでEricssonでは、2012~13年にはモバイルのユーザー数が65億人に到達すると見込んでいます。それも、1人ひとりが1つずつではなく、例えばテレビ、PC、携帯電話というように、複数のモバイルを所有するようになるのではないかと予想しています。また、HSPA(High Speed Packet Access)という規格がより普及してゆくと思えます。これは第4世代の技術と言われていています。第4世代の技術とは、大まかにいってユーザーあたり1Gbpsの通信速度を可能にと言われてはいますが、簡単に言えば、ワイヤレス通信がものすごく速くなる技術ということです。Ericssonはワイヤレスの技術に関して、世界で40%のシェアを持っていますので、第4世代の市場を先導し、今後更にシェアを拡大できると考えています。このような第4世代に対応した機器は現在、392種類のHSPA対応のカメラや携帯電話、340種類のHSPA内蔵PCやUSBモデム、73種類のワイヤレスルータなど、129の業者から805もの種類が提供されています。つまり、どのような機器であれ、今後登場するあらゆる機器は、すべてインターネットに接続できる能力を持つようになる傾向にあるということです。こうした機器上の変遷というものが、今後の発展の重要なカギを握っているといえるでしょう。また、これによって私たちのライフスタイルにも大きな変化をもたらすものと考えています。

またモバイルブロードバンドというものがあります。これは今現在、十分に通信手段を持っていないいわゆる開発途上国、私たちは高成長市場と呼んでいます。このような国々が無線でブロードバンドへ接続できるようになる技術を言います。というのも、通信手段を持たない国で新たに地面を掘ってケーブルを埋め込むよりも、無線装置を作って通信手段を確保するほうがずっと安価で、また製造から利用開始までの期間が短く済むからです。例えばオーストラリアは先進国ですが、物理的に広大な国土を有しており、より多くのカバーしなければならないエリアがありました。そこで実際に手がけた事業を挙げますと、私たちはわずか10か月でネットワーク環境と設備を構築し、人口の98%をカバーすることに成功しました。このように広大な地域における通信手段の拡大は今後さらに需要を増してゆくのではないかと考えています。

・成長と持続可能性のための技術とは

では、このような技術はどうすれば持続可能な形で利用できるのでしょうか。この議題について、Ericssonでは2点重要視しているものがあります。1点は、「みんなにとっての通信」、そしてもう1点は、「エネルギー及び気候の変化」です。

まず1点目、「みんなにとっての通信」というのは、貧困がどうやったら解決するのか、妊産婦の健康改善をどうしたらいいのか、というようなことを、もちろんすべての問題を解決できるとは考えていませんが、私たちの持っているノウハウを使って、それらの問題解決に貢献するということです。国連がミレニアム開発目標というものを作りました。私たちはそのうちの一つのプロジェクトであるミレニアムビレッジ計画というものに参加しています。つまり、電気通信のインフラを作ることによって、どのように人々の生活を変えられるのか、どういった種類のサービスをこの地区に住んでいる人達に提供できるのかを考え、実行してゆくということです。そこで私たちができることは、農村部や遠方に住んでいる人に対してヘルスケアを受ける、あるいは教育を受ける手段・チャンスを作るということです。具体的な目標としては、人々が何らかの公的な手続きをするのに、1か月に60km歩いて役所まで行かなくて済むようになるとか、子供がライブ映像を通じて教育を受けられるようになるというようなことを、ICT(Information Communication Technology: 情報通信技術)を通じて実現できればと考えています。

もう1点、「エネルギーおよび気候の変化」というのは、電気通信の機器が環境に対してどの程度マイナス面の影響を与えているかをチェックし、いかにCO2排出量を軽減できるかを考え、実現するということです。例えば、1時間の車の移動と、1年間の携帯電話の利用との環境への影響を比べたとき、同水準であるという調査結果が出ています。さらに私たちはタワーチューブと名付けた、環境への配慮を行いながら高い性能をもつインフラ設備を開発し、提供しています。このタワーチューブを利用すると、年間25%~40%のCO2の削減が可能になります。典型的な例で言うと、こういった装置の寿命全体における40~80tの削減となります。また最大50%以上のエネルギー、燃料の消費を抑えることができるようになります。加えて、電力消費を抑える機能もあります。より多くのお客様へ利用が拡大すれば、やがて自動車30万台のガソリン分のエネルギーが節約できるようになるでしょう。こういった新しいソリューションを導入することによってエネルギー効果を上げ、そしてCO2削減に貢献することができます。電気通信事業の装置、あるいは提供されているサービスというのは、環境にマイナスの影響を与えています。しかし賢い使い方をすれば、削減させる可能性もあります。例えば、会社へ行かずにテレビ会議を行うことで、移動にかかるエネルギー消費を節約することができる、といったようなことです。ICTの事業は今後、CO2の排出が劇的に増えてゆくことが予想されています。

Ericssonは、こうしたソリューションによって、この状況の改善に貢献できると考えています。

・タワーチューブの紹介

それでは、Ericssonの提供するソリューションのひとつであるタワーチューブについて、もう少し具体的にご説明致します。タワーチューブとは、Ericssonが独自に開発した送電用の鉄塔あり、無線基地局です。これは従来の鉄塔に比べ、4つの利点が挙げられます。それは、「構築しやすい」「保守しやすい」「コスト効率がすべての面において高い」そして、「環境への影響が少ない」という4点です。従来の基地局の構築方法では大きな土地が必要で、しばしば環境への適応が困難でした。またフェンスに囲まれ、年中警備する必要がありました。タワーチューブは、薄いコンクリートの壁とポストテンションされた銅線でできています。また極めて頑丈で、モジュール方式で構築するため、数日で建設可能です。内部に十分なスペースを内包していて、完全に密封されているうえ、鋼鉄の使用量は従来の鉄塔の10分の1で済みます。製造や輸送といった資材に関連するCO2の排出に関しても、従来の建設方法に比べ少なくとも30%は減少しています。無線装置はタワー頭頂部のアンテナの近傍に設置されているため、無線装置とアンテナ間の信号のための出力損失を最小限に抑えることが出来ます。もうひとつ電力消費に貢献しているポイントは換気です。タワーチューブは能動的な冷却を必要としないので、従来の基地局に比べて40%マイナスとなっています。占有面積も従来のものに比べ圧倒的に少ないため、賃借料もかかりません。CO2の排出も極めて少ないです。ごく一部ですが、以上Ericssonの提供する製品の一例についてご紹介しました。

・最後に

電気通信業者というのは、より持続可能性の高い社会を形作る上で重要な役割を担っています。私たちには、確かな通信の手段を世界中の皆さんに届けるという役割がありますが、人々が通信の手段を得るということは、作業の効率性を上げるということだけでなく、更に民主主義が推進されてゆくように思えます。それは、オープンな通信が導入された社会では、より自由な思想を持ったり、通信をしたりする環境が整うと言えるからです。私たちEricssonは、こうした社会の形成に向けてリーダーシップを取る絶好の立場にあると考えています。

(講演抄録文責 林壮一郎)

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved

第82回 スウェーデンの高齢者ケアのノウハウと日本での実践

Swedish Quality Care AB所長
ヨアキム・カウト

「講演のご案内」

スウェーデンも日本も高齢化社会です。2000年の時点で両国の65歳以上人口が同時に17%を超えました。しかし、ここに来るまで、スウェーデンは85年かかっています。ところが日本はわずか24年です。この間にスウェーデンでは失敗と工夫を繰り返しながら高齢者のための質の高い生活環境とソフトを築き上げてきました。そのノウハウは今後さらに進展する日本の高齢者ケアに対して大きな参考になります。

今回は、高齢者ケアの質の向上を目的に活動している、Swedish Quality Care AB の日本代表を務める、ヨアキム・カウトさんに

スウェーデンでのケアの実情と、日本におけるスウェーデン式ケアの実践の状況をお話いただきます。

ヨアキムさんはスウェーデンの大学で障害者教育、社会福祉プログラムを専攻し、4年前に来日してからこれまでずっと、スウェーデンのケアシステムを日本に紹介、実践する活動を続けてこられた文字通りのプロです。認知症を始め、高齢者の生活環境の質を高めるにはどうすべきか多くのヒントを与えて下さいます。

「講演の抄録」

わたしはSQC(Swedish quality care)で仕事をしています。

高齢者に対するケアに関して、福祉や医療についての情報、スウェーデンの情報を与え、またスウェーデンの施設などを紹介している。また、セミナーを開催し、人材を育成し、スウェーデンへ研修の派遣をする。

SQCは07年に設立された。スウェーデンの福祉の施設を紹介し、研修を行うのが大きな二つの目標である。それに付随したコンサルティング、商品の紹介と営業などの事業も行っている。高齢者ケアの質を高めるためである。

「日本人研修者インタビュー」

SQCからスウェーデンのイースレムの高齢者施設で研修している看護師に日本とスウェーデンの違いを聞いた。

同氏によると、食事、排せつ、散歩、解除は日本と同じだが、時間の使い方がスウェーデンは違う。入居者に対して介護人が手を握ったりして、スウェーデンではゆっくり時間をかける。ただ、スタッフのミーティングのときなど、入居者だけを残して、看護人をつけないのが気になった。

スウェーデンには外国からの移民も多く、看護師には外国人も多い。看護人はいくつかのユニットに分けられている。同氏のユニットは6名で作られている。うち2人は移民であった。ユニットは入居者8人に対して職員が6人で、有給の補充員も確保されている。

夜勤には専門看護人がいる。入居者70名に対して夜勤は3名。夜勤は夜の9時から翌朝の7時まで働く。

「スウェーデンと日本の違い」

日本とスウェーデンの福祉医療現場の平均給料を比較する。介護士はスウェーデンが月給23万円で、日本は22万7000円。看護師はスウェーデンが28万円で日本は38万円。ドクターはスウェーデンが54万円で日本は116万円。スウェーデンのドクターにはほかに手当がつく。

スウェーデンの社会福祉コストは、すべて税金でまかなわれる。都市や田舎にも違いはなく、みんなが平等なサービスを受ける。自治体が責任を持ってやる。委託される民間企業も増えて40パーセントくらいになっている。日本では民間企業が多い。日本ではオーナーの考えで施設の雰囲気も変わる。お金の掛け方でも施設の差がある。スウェーデンではそういう差はほとんどない。

スウェーデンでは福祉用具をたくさん使う。25キロ以上は運んではいけない、職員は勝手に一人の人間を運んで

はいけないという規則があるので、福祉用具を使う。日本は福祉用具をもっと活用していいと思う。車椅子は日本は1万円だが、スウェーデンでは14万円もする。しかし、日本の車椅子は調整ができず、サイズを変えられない。快適でなく利用率も低くなる。

スウェーデンでは車椅子や歩行器は無料で貸し出している。歩行器は4万から6万円くらいする。しかし、使う人間がけがをしまうと420万円の医療費などがかかる。日本は介護保険はあるが、良い歩行器が必要である。保険を考えたら、用具に金をかけるほうがよいと思う。

また入浴はスウェーデンはシャワー。風呂は使わず部屋の中でやるが、日本は外でやって裸が丸見えになる。寒さ対策は十分でない。

「福祉関連用具について」

福祉用具は、投資として考えてよいものを20年間使うという風にしたい。使いでの良くないものは、安くても長く使えず、介護人にも負担がかかる。

40から50年くらい前はスウェーデンも大規模施設が多かった。寝たきり老人、精神病患者など区別がなかった。しかし、人の尊厳が守れず、小規模なものに変わってきて、これは日本でも同じだ。

施設を作る前に建物などを考えてもらいたい。耳の不自由な人を考えてホールの大さを考える、部屋ではアットホームな感じを大切にす。スウェーデンはすべて個室で、家族の写真を置いている。認知症患者は、写真など見て記憶を思い出すことができる。また家族写真があれば孤独感も緩和する。介護人も話題を発見できて対応しやすくなる。

スウェーデンでも、最近では高級な介護付きマンションが作られている。60から120平方メートルくらいを作ったら、15000万円から6000万円もする120平方メートルの部屋が最初に売れた。

部屋のつくりと配置も大事だ。個室でも孤独感を与えないように、ドアを開けると他人が見えるようにつくる。中央にホールを造る。また、患者が安心するための、レギュラーのスタッフ、コンタクトパーソンがいることが必要。コンタクトパーソンにケアプランを相談して、クライアントの生活歴の作成をしたりする。たとえば一緒に部屋の掃除をするのもよい。スタッフと患者がゆっくり時間を共有することで、理解を深めることができる。

「ブネ法について」

ブネ法という音楽療法の説明をする。

ブネ先生が考案した障害者や育児のために音楽を使った治療法である。ふつうは音楽療法士が歌を歌ったりするが、ブネ先生は患者にも楽器を使って音を出してもらいたいと考えて、簡単な楽器を考案した。

たとえばギターは簡単にコードを弾けるよう工夫した。だれでも弾けるように、振るだけでコードができるとか、スイングバーを倒してコードが弾けるようにした。視覚障害者のために見やすい色をつけた。コードを色で決めて、テキストにはその色わけで書く。一人がスイングバーを倒し、一人が弦を弾いて二人で演奏する。それによって、集中力が必要とされる。また自分のパートをプレイしながら、全員と合わせなければいけない。

それが患者の治療に効果的なのである。

(講演抄録文責 JISS所報編集部)

私のスウェーデン

JISS スウェーデン語受講者 山口元子

* ダグ・ハマーショルドのこと

第2代国連事務総長だったダグ・ハマーショルドが1961年に亡くなった時、私は12才だった。その突然の死はよく記憶している。その後彼の日記、「道しるべ」が出版され、私も購入し読んだ。当時の私の理解はまだ浅く、国連事務総長として、公的にトップにあつた人の記録として読んだ。

その後、ブライアン・アークハート(当時ハマーショルドの部下だった)の「炎と砂の中で—PKO[国連平和維持活動]に生きたわが人生—」のハマーショルドについての記述は、かれの超人的な仕事ぶりと高い人格を彷彿とさせ感動した。

また私がかつて購読していた婦人雑誌に「平和思想の系譜」というシリーズがあり、そのひとつが「バツコクラの残影—平和のしもべダグ・ハマーショルド」(最上敏樹 著 婦人之友 1989・3月号)だった。スウェーデンのバツコクラという小村に、ハマーショルドが生きていたら夏の家用いるはずだったという農家がある。「...それは簡素だが凛とした趣きをたたえた家だった。中にはハマーショルドが生前愛用していた家具などがおさめられ、一種独特の静謐さが漂っている。首を伸ばせばバルト海を臨むことのできる小部屋に置かれた事務机に腰を下ろすと、案内の人が肩越しに、「事務総長時代にニューヨークで使っていたものなんですよ」と言った。この机であの日記も書き綴ったのだろうか、と思った。」

私はこの雑誌を今でも大事に持っている。バツコクラという場所に行ってみたいと思うようになった。

* 最初のスウェーデン行きと夫の死

夫は3年半前、57才で亡くなった。筋萎縮性側索硬化症(ALSとも呼ばれる)という病気で、約15年間、在宅で闘病生活を送った。そのうちの10年間は人工呼吸器を装着している。この病気は残酷な病気で、頭は犯されないが運動神経が次第に犯され、自力呼吸もできなくなり、まぶたも上がらなくなる。発病当時、夫の仕事の関係で山梨に住んでいた。私達は東京出身だが戻ることはせず、韭崎に、闘病のためにバリアフリーの家を建て、夫はALS協会山梨県支部の設立に取り組み、コミュニケーションが困難になり、その任に堪えられなくなるまで支部長をつとめ、自宅はその事務局だった。

呼吸器をつけた神経難病者の在宅ということで、山梨県のさきがけとしてマスコミにもとりあげられ、家族介護では無理な部分をフォローするために、様々な人が出入りし、さながら在宅医療の1モデルとして自宅は半ば公的な場と化した。その中で様々な葛藤があり、夫の病気もさることながら、プライバシーが守られないことが一番こたえた。心の平安を追い求めた。

そんな中で何回も何回も読んだのがハマーショルドの「道しるべ」だった。ハマーショルドの倫理観の高さにとにかくひきつけられた。

何回も読むうちに、この人は詩人なのだと感じはじめた。自然の描写に心うたれた。

「...ラプラントの秋のあたたかな東風が、水の涸れた川に沿って、雨をふきつけながら過ぎてゆく。岸边では、黄ばんだ樺の木立ちが暴風雨に曝されて揺れ動いている。...」

このように訳されている箇所は、スウェーデン語ではどういう風にかかれていたのだろうかと思った。韭崎穴山の自宅の中2階から眺める鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳を眺めながら、ハマーショルドの愛したスウェーデンの北の山々はどんなだろうか...

夫は亡くなる1年位前からしきりに東京に戻りたがった。呼吸器をつけた神経難病患者が新たに住む場所を代えるということは簡単なことではない。山梨での在宅の筋道は、夫本人がリーダーシップをとって1つ1つクリアしてきた。それは夫にとって当然のことで、今こそ「当事者主権」ということが言われているが、当時医療関係者の間では、わがままな患者と見られることもしばしばだった。東京行きを実現しなければ後悔すると漠然と思った。

夫は腹膜炎を起こし救急車で運ばれた。一命をとりとめ、持ち直した。東京行きを実現するため動き始めた。受け入れ病院との折衝、安定した時の住居の確保、病人の搬送等々。東京に戻ってきた時の夫の安堵の表情は私を安心させた。夫と私の共通の友人が見舞いに来てくれた。その友人と近くの駅付近で食事をした時のことである。

私はただあこがれを口にただけだった。「パッコラに行ってみたい、ハマーショルドが夏の家として準備していた場所だから」と言った。友人の答えは意外なものだった。彼女は手帳を見て、「行けるわ」と言ったのである。

2005年の夏、私ははじめてスウェーデンの地を訪れた。入院して安定してきた夫の退院をまじかにして、行く前日まで、東京での在宅をはじめるケア会議が行われた。山梨で夫が取り仕切ってきた在宅のノウハウを夫にかわって東京で私がやる番だと覚悟していた。

「東京での在宅を元気に始めるため、スウェーデンに行ってくるわ、ハマーショルドの夏の家に行ってくるの・・・」反応の少なくなった夫の眼が大きく開き、私を見た。

パッコラにはスウェーデン最南端の町イスタッドからバスで行った。2005年はハマーショルド生誕100年にあたっていた。行く直前にそのことを知った時、私達は興奮した。国連が企画した各種イベントの中にパッコラのハマーショルド資料館の中庭を会場にした講演会があった。全くスウェーデン語が解らないのに、達は好奇心から聞きに行った。東洋人は私達だけだった。私達は7月23-25日までパッコラに滞在したのだが、29日のハマーショルドの誕生日には当時の国連事務総長のコフィ・アナン氏を迎えて記念式典が行われるとのことだった。資料館では生誕100年にあわせてハマーショルド関連の本が何冊も置かれていて、10冊近くの本を風呂敷に包んで大事に抱えている私の写真が残っている。

資料館で印象的だったのは、ハマーショルドの用いていた引き出しなどなにもない大きなテーブルと背もたれの長い椅子、そしてバーバラ・ハップワースの非常にシンプルな木の彫刻だった。ニューヨークの彼の住居にもハップワースの彫刻が置かれている写真がある。ハップワースに手紙を書き、その6日後にハマーショルドは亡くなっている。

スウェーデンから帰国して2ヶ月後に夫は亡くなった。何度も死を切り抜けてきた夫はもっと生きると思っていた。辞書さえあれば買って来た本が読めると、在宅を支えるエネルギーになると、当時は思っていた。

*再びスウェーデンへそしてこれから

いま私は実家のある東京、武蔵野市に母と私と犬とで暮らしている。娘は近くに住んでいて、時々やって来る。私の役目は認知症のある母の見守りと、一緒に食事をするのである。去年の夏、1人で1ヶ月間ウプサラに行ってきた。母には2週間ごと3箇所ショートステイをしてもらった。目的は語学学習である。もう1つ目的があった。ハマーショルドの育った町、ウプサラに住んでみたかったのである。彼の住んでいたウプサラ城の裏が私の泊まっていたウプサラ大学のコリドールと呼ばれる寮だった。よく散歩をし、城の一角にハマーショルドの展示をみつけた。そこで手にいれたDVDは彼の国連での演説等、貴重な映像を見ることができる。理解の程はまさにこれからの勉強にかかっている。また大聖堂の中にも平和の礼拝所として、ハマーショルドの言葉の刻まれている場所を見つけた。1か月間、24時間を自分だけのために費やせる贅沢を味わった。

「___夜は近きにあり。」

始むるを許されし我が業を成し遂げさせたまえ。

花咲き満つべしとの保証はなからんとも、われを

していっさいを与えさせたまえ。

「道しるべ」1954年

イエーテボリを舞台にした『ステフィとネツリの物語』シリーズについて

フリーランス・エディター／ライター
塩田 敦士

1940年代、第二次世界大戦を背景に、イエーテボリと周辺の群島を舞台にした物語がある。スウェーデンの作家、アニカ・トールによるヤングアダルト向けの四部作で、新宿書房から刊行中の日本語版では『ステフィとネツリの物語』というシリーズ名をつけた。第1作の『海の島』(En ö i havet)はスウェーデンで1996年に刊行されている。この作品は彼女のデビュー作ともなったが、翌年以降、続く物語が年1作ずつという形で、『睡蓮の池』(Näckrosdamen)、『海の深み』(Havets djup)、『大海の光』(Öppet hav)と1999年までの間に出されている(『』内は日本語版のタイトルで、『海の深み』まではほぼ原題のままだが、『大海の光』のみ原題を直訳すると「海がひらけて」となる)。シリーズは国の内外で好評を博し、多くの賞を受賞した。日本のほか、ドイツ、オランダ、ノルウェーなど多くの国でも翻訳出版されている。2003年にはSVT(スウェーデンテレビ)で、作者本人の脚本によりテレビドラマ化され、スウェーデン本国ではこのドラマのDVDも発売されている。筆者は本シリーズの日本語版の編集者として作品にかかわっているため、今回はこのシリーズについてご紹介したいと思う。

物語の内容について

この物語の主人公はステフィとネツリという姉妹である。第二次世界大戦の初期、スウェーデンが500人のユダヤ人の子どもたちを受け入れたという史実の中から生み出された架空の人物だ。1939年、オーストリアのウィーンから、他のおおぜいの子どもたちといっしょに列車で遠路はるばるイエーテボリにやってきた。物語は彼女たちをのせた列車が、イエーテボリ中央駅に到着するところから始まる。他の子どもたちがみんな、駅に迎えにきた受け入れ先の養親に引き合わされ、駅を出ていくのに、彼女たち姉妹だけ最後まで残される。スウェーデン語も分からず、不安に思う彼女たちは、そのまま島に行く汽船の乗り場に連れていかれ、自分たちだけ汽船にのせられ島へ。船着場ではアルマという女性が彼女たちを待っていた。姉妹はアルマに連れられ、明るい色調で居心地のよいサンルームのある家に着く。やっと落ち着けると思ったのもつかの間、いっしょに暮らせるはずだった彼女たちは、離ればなれになる。アルマの家は漁師の夫シーギェルトと彼らの子ども、エルサとヨン姉弟の家族だが、この家にはネツリが預けられる。姉のステフィは、アルマの家で待っていたアルマの従姉妹のメルタの家へと連れていかれる。メルタは漁師の夫、エヴェルトと質素な造りの家に暮らしている。アルマとメルタ、この二人の人物描写がじつに対照的で、アルマは子どもにやさしいが、メルタは厳しくとつきにくい。これがお話の冒頭部分のあらましである。

1939年、彼女たちが連れて来られた当時、姉のネツリは12歳で妹のネツリは7歳。開業医の父と、元オペラ歌手の母のもとで、何不自由なく暮らしてきた姉妹が、日々激しくなるナチスドイツの迫害から逃れるため、言葉も文化も習慣も違う、スウェーデン西岸の寂しい漁村に連れてこられる。そして養父母のもとで暮らし、新しい言葉を覚え、地域の学校に通い、新しい人々と出会う。スウェーデンにきた当初は、実の両親にそのうち出国の許可が出て、家族は再会できるだろうという望みもあった。だが戦況が深刻化していくなかで、それは叶わぬものとなる。両親とは手紙でしか連絡が取れず、またスウェーデンも中立国とはいえ、ノルウェーやデンマークなど周辺諸国は次々にナチスドイツに占領されていく。エヴェルトやシーギェルトのような漁船で漁をする漁師たちは機雷に触れたり、あるいはドイツ軍に爆撃を受けたりという危険と隣り合わせの中で日々の糧を得なくてはならない。さらに生活のための物資も不足するようになるなか、不安な毎日ですごさざるをえない姉妹。彼女たちを受け入れたスウェーデン人にとっても不安な日々を、物語は描いていく。

この作品の魅力とは

しかしそれだけのお話なら、戦中の体験を描いた、とても厳しく、寂しいお話のように感じられるかもしれない。もちろんスウェーデンに避難してきたユダヤ人の戦時体験(あわせて一般のスウェーデン人の戦時体験)を伝える、ということも本作の一つの要素ではある。このあたりのことだけでも、これまで日本ではあまり知られていないと思うので、貴

重だと思うが、本作はそれだけの物語ではない。この作品のいちばんの魅力は、思春期前後の多感な年ごろの少女たち、とくにステフィの視点を通じて、さまざまな経験を重ねていく様子が、実に生き生きと書かれているところにあると思う。ステフィは島の小学校に1年通い、その後イエーテボリの市街地にある女学校に通うことになるのだが、ごくふつうの少女が経験するだろう友情や恋愛、友人たちや教師たち、妹のネツリや養父母、実の父母ら登場人物との人間関係などが、日常の出来事を通して、生き生きと語られる。同時に、当時のイエーテボリの町や、島のような(ただし物語の舞台は特定の島ではなく、イエーテボリの南方、西方の島々がモデルだという)も細やかに描写されている。

このあたりのことについては、原作者のアニカさんにも一度お会いしてお話を伺ったことがある。この物語自体は架空のお話ではあるものの、ユダヤ人の子どもたちがスウェーデンに避難してきたといった史実を含め、当時の時代考証についてはかなり力を入れられたようだ。史実に基づいて組み立てられたことで、物語がよりリアルなものになっているのだろう。また、舞台となっているイエーテボリの町並みや島のようなすは、いまでも当時とさほど変わっていない。港湾地区やイエータ川沿いの造船所だったところなど、再開発されてきれいなビルが立ち並んでいるような場所もあるが、昔からある街並みはほとんどそのままだ。自分自身もイエーテボリに何度か足を運んで物語の舞台をみてまわったが、本の中と同じように、島ではいまだに自転車が主な移動手段であったり、イエーテボリの女学校がいまも芸術系の大学の校舎として使われていたり、ステフィが下宿していたという設定のアパートがいまもそのまま残っていたりといった様子を目の当たりにして、なんだか感動してしまった。

作品を知ったきっかけなど

この本と出会ったのはスウェーデン協会(Svenska institutet)が主催する、スウェーデン語のサマーコースだった。午前中行われる正規のレッスンとは別に、何冊かあるスウェーデン語の本から1冊選び、先生を囲んで同じ本を選んだ人どうして輪読する、という時間が午後になり、そのために何の気なしに選んだのがこのシリーズ1作目の『海の島』だった。当時はスウェーデンにおける第二次世界大戦中の史実などにも知らなかったし、イエーテボリあたりの地理にも疎かったが、拙い語学力でも読んでみると物語のもつ面白さ、登場人物たちのいきいきとした描写は十分に伝わってきた。また、この話に続きがあることが分かったと、どうしても話の結末が知りたくて残りの3冊も入手して読み、シリーズとしてのこの物語の素晴らしさも知ったのだった。

同時に、ここに書いてきたような魅力あるこの物語を日本のみなさんにも知っていただこうと、日本語版の出版も企画した。翻訳者の菱木晃子さん、出版社の新宿書房代表の村山恒夫さんに相談し、快諾を得ることができ、2006年に初刊の『海の島』刊行にこぎつけた。刊行にあたっては、本来、対象年齢がスウェーデンではティーン向けなのだが、歴史的な背景なども考えると子ども向けとするには惜しいので、子どもだけでなく、広く一般の人に読んでもらえるよう工夫した。

『海の島』の刊行後、読者の方々からは大きな反響をいただいた。続きを早く読みたいという矢のような催促もあった。2008年の5月に第2作の『睡蓮の池』を出すことができた。第3作の『海の深み』はもう間もなく発売の予定で、続く最後の1作もこの初夏までには刊行しようと、菱木さんにお忙しい中、翻訳を進めていただいているところだ。既刊の読者のみなさんにはぜひご期待いただきたいし、まだ手に取られていない方も、ぜひこの機会にお読みいただければと思う。

また、本書を手にとられて興味をもたれたなら、イエーテボリをお訪ねになってみてはどうだろうか。たぶん関係のある主だったところをまわるには1日あれば足りると思う。ステフィやネツリ、そして姉妹とかかわった登場人物たちがいた時代を想像しながら、ゆかりの場所を歩くというのは、なかなか感慨深いものになるに違いない。

学生の議論と主体性を引き出すスウェーデンの大学環境

(ウメオ大学国際公衆衛生大学院修士課程/スウェーデン政府奨学生)

小林秀行

はじめに

2007年9月よりウメオ大学の修士課程に留学している。EU内では1999年のボローニャ宣言を受けて高等教育制度の統一が進んでおり、本課程もそれまで1年制であった修士課程のプログラムを2007年度より2年制(120ECTS単位^{*1})に拡充した。拡充後の初年度入学となったため、カリキュラムをはじめ運用面で様々な問題を入学以来経験しているが、はからずも、スウェーデンの大学において生じた問題を、教職員と学生がどのように解決していくかを知るよい機会となった。本稿では、問題解決へ向けた大学における教職員と学生の協働について、また、そのために必要となる学生間の議論を学生がどのように深めているか、一学生として在学した経験を基に報告する。

*1: EU内の学生の移動の促進と、生涯教育に向けた個人の単位累積の促進を目的として、高等教育の単位を統一するヨーロッパ単位互換制度(European credit transfer and accumulation system; ECTS)が導入された。1週間、100%の修学が1.5ECTS単位、1学期間、100%の修学が30ECTS単位に相当する。

教員と対等に発言する学生

留学生がみな驚くことの一つは、学生が教員と対等に発言することである。"Dr. Professor"の称号抜きで教授に呼びかけることにはEU内出身者にも新鮮な様子で、これもボローニャ・プロセスの一つの効果であろう。学生の発言は講義中の質問にとどまらない。各科目のイントロダクションの時には、その授業内容でシラバスに掲げられている到達目標に達するののかという質問がされたり、逆に教員から、授業方針について意見を求められたりもする。また、パワーポイントが見にくいなどの意見もなされる。内容が分かればよいのではないかと内心思ったが、その次の講義時からパワーポイントが見やすくなり、学生の理解を助ける教材としての質が上がっている。このように、学生が教員に対等に意見することにより、教員の講義スキルは効果的に高まり、授業の質も向上するものと納得する。

学生が教員と対等に意見し合える土壌の背景には、お互いに呼称を付けずにファーストネームで呼び合うスウェーデンの人間関係に依るところもあるだろう。しかし一方で、大学は教授、准教授などの役職の差異および学位の有無によりヒエラルキーが存在する組織であり、学位の授与審査や教授の昇任審査がきわめて厳密に行われるスウェーデンの大学は、決してその例外ではない。そうした状況にありながら学生が教員と対等に話し合えることには、学生により組織されている学生組合の活動によるところが大きいのではないだろうか。

学生組合について

学生組合は大学とは別に、学生が主体となって運営しているが、ウメオ大学では、科目の試験を提出する際に組合員証の提示が義務付けられており、実質的には強制加入となっている。本学には4つの学生組合があり、所属学部によってどの組合に加入するかが決まる。組合費は1学期(半年)で240クローナ(約2,600円)である。学生組合によっては特定の政治イデオロギーをもつ組織もあると聞かすが、私の所属する組合は政治的に中立である。

学生組合の本部は、週末の夜から深夜にかけてバー・ディスコに早変わりする。また、組合員証の提示により航空券や鉄道乗車券が学生価格で購入できる。そもそもスウェーデンでは25歳まで若年者割引が設定されているが、私のようにこの割引に該当しない年齢の学生には利用価値が高い。例えばウメオからストックホルムまでの航空券は、時期や時間帯にかかわらず499クローナに設定されており、エコノミー割引運賃の7割引となることもある。このように、学生組合は一面では学生の福利厚生面での活動が大きい。

学生組合の運営上の意思決定は、各学科・専攻から選出される代議員と、その中から選出される委員長によりなされている。委員長の仕事については、他の大学であるが、カロリンスカの学生組合委員長である学生と研究上の話で飲みに行ったときに興味深く聞いた。彼女曰く、委員長はちょっとした企業の社長と同じくらいの経営手腕が求め

られるそうである。委員長には給料*2 が支払われ、彼女はその間休学して委員長の仕事に専念していた。なお彼女は研究者志向であり、復学後は博士課程進学を目指すとのことであった。

*2: 組合役員に支払われる給料は、国から学生に給付・貸与される奨学金に相当する額だといひ、休学して組合業務に100%従事する場合と、100%修学している場合とで収入は変わらない。50%修学・50%組合業務従事という選択肢もあり、その場合は国の奨学金と組合の給料を半額ずつ受け取る。100%修学の場合の奨学金額は、給付・貸与額合計で月8,000クローナ弱である。

学科・専攻における教員と学生の問題共有

さて、学生組合と各学部・専攻を結ぶのは、各学科において選ばれる代議員である。本学部の学生組合では、学科・学年ごとに、10名に1名の割合で代議員を選ぶ。(男女比は半々と定められている。)そして、各学科の代議員は、その学科の教員代表と定期的に会議を行い、情報交換を行っている。この会議では、学生組合の代議員であるということが、教員代表と会議する根拠である。私の所属する専攻の例では、5名(男性2名、女性3名)の代議員が、2名の教員代表(講師クラス)と毎月会議を開いている。会議前には学生間で提案や問題点を集め、また教員側から問題提起されることもあり、会議後にはその内容が全学生にメールで周知される。

この会議で話し合われる問題は多岐に渡る。所属専攻の例では、プログラムが拡充されたことに伴う科目間の整合性の問題など、専攻における教育から、授業に遅刻する学生が多いなどの学生の実態に至るまで、問題点が学生・教員の双方から数多く挙げられた。学生集会室の整備の要望、夏季休暇中のパソコン室の扱いなど、学生を取り巻く施設の充実に関する件も話し合われ、教員側からは具体的に予算も示された中で学生用施設の整備が計画・実施された。病気で亡くなったクラスメートへの対応、学生間のセクシュアル・ハラスメントへの対応なども話し合われ、学生・教員間で解決策が探られた。また、専攻が得ている助成の一部を学生用奨学金として給付する際には教員側から相談があり、「発展途上国出身者に給付する」という助成団体の求めが満たされる限りにおいて、給付内容・方法を学生が決定することとなった。その結果、それまで数名の学生に毎月定額の奨学金を支給していたことを改め、フィールド調査に赴く発展途上国出身の学生全員に交通費として支給されるように決められた。結果の良し悪しはともかく、学生が決定した通りに奨学金が配られている。

このように、学生と教員の間で定期的に問題共有の場があることが、学生が教員と対等に意見し、さらには専攻の運営にまで学生が主体的に参画できる環境作りにも効果をもたらしている。また、学生の意見を集約する際には、権限をもって自律的に動く学生組合の代議員が大きな働きをしている。

学生間の議論を支える図書館

学生間の議論は教室でもメール上でも活発であるが、それは図書館でも健在である。初めて図書館に入った時に驚いたが、図書館内では至る所で学生グループが本を広げて話し合っている。食事は不可能だがコーヒーは飲んでよい。飲み物なしで話していると、空気の乾燥しているこの国では喉がすぐ乾くのであるが、適度にコーヒーを補充することで議論も盛り上がる。

一般的な日本の図書館では、館内では静粛にすることが求められ、また、閲覧室内への飲み物の持ち込みもNGであろう。暑い日に冷房のあまり効かない図書館でペットボトルのお茶を飲もうとでもしたら、「館内飲食厳禁です」と書かれた札をもった職員が飛んできて、無言で威圧されたりする。もちろん図書館は知識の府であり、尊重することは必要であるが、日本の図書館はどこか居丈高で敷居が高い。もっとも、居眠りしている学生や資格試験の受験勉強をしている学生が多いのも日本の大学図書館の光景だが、ここの図書館にはそうした学生は皆無である。

なお、館内には私語禁止のsilent roomや、登録制の調査・研究用スペースも設けられており、静かな環境で読書や調査を行うこともできるように配慮されている。このように学生は日頃から、必要な知識を図書館で調べ、それを学生間で議論・共有し、知識や思考を深めている。

おわりに

日本の大学研究室では、「アルコールの摂取量が研究室のモチベーションの高さを表す」などという冗談があるが、酒が入らないとなかなか本音の議論が交わせないというのも実情であろう。スウェーデンの大学では学生が教員と対等に発言でき、日常的に活発な議論が行われている。そしてその議論により学生の見識は効果的に深められ、さらに、学生の主体性も培われていることが、一学生として学ぶ中で発見したことである。

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1 応募資格

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受けません。

2 内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字(程度)、1,600字(程度)、3,200字(程度)のいずれかの文長でお願いします。

(まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい)

3 掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。

送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4 謝礼

ご投稿には薄謝を進呈いたします。

5 原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局 所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。